救いの確かさの根拠

ヨハネ福音書10:19-30

【新改訳 2017】

10:19 これらのことばのために、ユダヤ人たちの間に再び分裂が生じた。
10:20 彼らのうちの多くの人が言った。「彼は悪霊につかれておかしくなっている。どうしてあなたがたは、彼の言うことを聞くのか。」
10:21 ほかの者たちは言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。見えない人の目を開けることを、悪霊ができるというのか。」
10:22 そのころ、エルサレムで宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。
10:23 イエスは宮の中で、ソロモンの回廊を歩いておられた。
10:24 ユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと言ってください。」
10:25 イエスは彼らに答えられた。「わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証ししているのに、
10:26 あなたがたは信じません。あなたがたがわたしの羊の群れに属していないからです。
10:27 わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。
10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。
10:29 わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。
10:30 わたしと父とは一つです。」

【祈りながら考えよう】

（1）ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こったのはなぜですか。

（2）ことばと奇跡によって証ししたのに、主をメシアと信じなかったのはなぜですか。

（3）羊のように弱い私たちが「決して滅びることがない」と言い切ることができるのはなぜですか。

【解　説】

（1）再び分裂が生じた

「**これらのことばのために、ユダヤ人たちの間に再び分裂が生じた**」（19節）

良い牧者について語るイエスのことばを聞いて、ユダヤ人たちの意見は再び割れた。「**彼は悪霊につかれておかしくなっている**」と言う者たちがいる一方で、「**見えない人の目を開けることを、悪霊ができるというのか**」と反対する者たちもいた。

主の御言葉を聞いた人々の間に分裂が起こったのは、これで三度目である。7章43節では、群衆の間において起こり、9章16節では、パリサイ人たちの間に起こった。今度はユダヤ教の指導者たちの間に起こった。

主が語られる御言葉を聞く人々の間に分裂が起こるということは、決して不思議なことではない。主は、はっきりとこう言明しておられる。

「**わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。**
わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです」（マタイ10:34）

ここで主が語っておられることは、見せかけの平和、偽りの平和、表面的な平和を壊し、本当の平和をもたらすのだということである。新しい家を建てるためには、もう老朽化して倒れかかっている危険な古い家を壊さなければならない。そうしなければ、そのような家をいくら修理しても、危険は一向になくならないからである。

それと同じように、本当の平和が築かれるためには、偽りの平和、見せかけの平和、表面的な平和は壊されなければならない。主の福音が語られる時、一時的に波立つことがある。恵みの福音が、人々の腐敗を明るみに出し「多くの人の心の思いが現わ」（ルカ2:35）されたとしても、福音そのものに誤りを見いだすことにはならない。

（2）宮きよめの祭りで

「**そのころ、エルサレムで宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。**」（22節）

そうこうしているうちに、宮きよめの祭り（ヘブル語でいうハヌカー祭）が始まった。太陽暦でいえば十二月。主イエスはその生涯における最後の冬を迎えていた。

この祭りの由来は紀元前二世紀にさかのぼる。当時ユダヤはシリアの属国であった。シリアのアンティオコス4世が、自分こそは神の顕現（けんげん）であるとして、セオス・エピファネスと称し、エルサレムにギリシャのディオヌソス神を信じる宗教を作らせ、エルサレムの神殿の祭壇には、オリンポスのゼウスの神の像を立てさせ、豚をささげさせるような冒瀆的（ぼうとくてき）なことをした。

そのため、ハスモン家の祭司ユダ・マカバイが中心となり、ユダヤ教の礼拝の回復を意図し、ユダヤ民族の独立のための戦いを開始した（マカバイ戦争／紀元前168年 － 紀元前141年）。そして、エルサレム神殿を奪回（だつかい）し、祭壇から一切の憎むべき像を取り除き、新しい祭壇を神殿の庭に作った。

これが紀元前164年のユダヤの暦（こよみ）で第9月のキスレウの月の25日に行われたところから、今日（こんにち）の暦（こよみ）の12月に一週間、宮きよめの祭りとして祝うようになった。

（3）政治的メシアと霊的メシア

主イエスがエルサレムの神殿のソロモンの廊のところを歩いておられた時、ユダヤ人の指導者たちが主イエスを取り囲んで、詰問した。

「**あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと言ってください**」（24節）

それに対して、主ははっきりとこう言われた。

「**わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証ししているのに、あなたがたは信じません。あなたがたがわたしの羊の群れに属していないからです。わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。**」（25-26節）

主は、彼らの質問に対して、まずこう答えておられる。「**わたしは話したのに、あなたがたは信じません**」すでに、主はご自分がキリストであることを何度も語っておられる。それなのに、彼らはそれを信じなかった。

それは、彼らが考えているメシア（救い主）観と主が意味しておられるメシア観とが違っていたからである。

彼らのメシア観は、エルサレムの神殿で宮きよめをしてくれたユダ・マカバイのような人を考えていた。いわば政治的なメシアである。しかし、主が語っておられたのは、羊のためにご自分のいのちを捨てる霊的メシアであった。

そこで、主は次のように言われた。

「**わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証ししているのに、あなたがたは信じません。**」

主イエスが父なる神から遣わされたメシアであるということを、父なる神のお名前によってしているいろいろな救いのわざ、いやしのわざが証明しているのである（ヨハネ3:2、5:36、7:31、9:33-34、使徒2:22）。

それはあたかも主が次のように言われたかのようである。

「わたしの行った奇蹟は、わたしがメシアであることの十分な証拠である。わたしが約束されたメシアであるという事実以外に、これらの奇蹟を説明できるものはないからである。」

ところが彼らは、それを信じなかった。なぜ彼らは信じなかったのかと言うと、それは、彼らが

「**あなたがたがわたしの羊の群れに属していないからです。わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。**」（26-27節）

彼らが信じないのは、主の羊ではないからである。このところを間違って理解しないようにしなければならない。これは彼らがイエスの群れに属していないので信じないというのではなく、彼らが信じないということがイエスの群れに属していない証拠であるということである。

だから今イエス様を信じていないのは自分がイエス様の羊ではないからだと諦めてはならない。イエス様の声を聞いて彼に従うなら、あなたもイエスの群れに属することができるのである。

主は、本当の信者のことを、「わたしの羊」と呼んでおられる。そして、「**わたしの羊はわたしの声を聞き分けます**」と言われた。元々キリストのものとして選ばれた者たちは、主がその羊たちに、悔い改めて信じ、ご自身のもとに来るようにと招いてくださる時、その招きに聞き従うことができる。

羊は、弱く愚かで、無力で、道に迷いやすい動物である。その点においてキリスト者とよく似ている。しかし、羊が羊飼いを信頼している限り、たとい弱く愚かで、無力で、道に迷いやすくても、安全である。しかも羊は自分の羊飼いをよく知っており、羊飼いについて行く。キリスト者も、私たちの羊飼いである主に信頼し、主の導きに従っているので安全である。

（4）救いの確かさ

主は、キリスト者の「救いの確かさ」について、こう言明された。

「**わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。**」(28-29節)

羊飼いである主は羊であるキリスト者の特権について語り始められた。主は羊たちに永遠のいのちを与えられる。それは、この世においては赦しと恵みの絶大な賜物であり、来たるべき世においては栄光のいのちである。

主は「わたしは与えます」と現在形で語られた。永遠のいのちとは、すべて信じる者が今持つことのできるものである。主は彼らが永遠までも、決して滅びたり失われたりすることはなく、誰もキリストの手から彼らを奪い去ることはないと宣言された。

ここには主イエス・キリストの神性と尊厳が語られている。真の神以外の誰も「**わたしは永遠のいのちを与えます**」と言うことはできない。それは使徒たちといえども、かつてそのように言うことのできた者はいなかった。

ここには信者に与えられる恵みの永続性と彼らが決して捨てられることはないという確かさとが語られている。

この個所を読む時にアルミニアン派のようにこの教えを否定して、真の信者といえども堕落して失われることがあると、どうして言えるのか。それはとうてい理解できないことである。

ここには、人も、天使も、悪魔も、霊も「だれひとりとして」キリストからその羊を引き離すことのできるものはないという明瞭な約束が述べられている。ギリシャ語の文字通りの意味は「**だれも**」ではなく、「**どんな人も、どんなものも**」である。

この個所で明白に教えられている教理は、「カルヴィニズム」（カルヴァン主義）と呼ばれている。私たちがなすべき質問は、それが聖書的かどうかということである。この問いに対する最も簡潔な答えは、この個所で教えられているそのままの明白な意味を素直に受け取れば、決して他の解釈はできないということである。

「キリスト者の救いの確かさ」に反対する者たちが修正句を挿入して「『彼らがわたしの羊であり続ける限り』**彼らは滅びることがない**」とすることは、聖書に付け加えることであり、キリストのことばを不当にも変えることである。

決して滅びることはないと言われているのがどのような者であるか、それはキリストの声を聞いて従う者であり、「羊」以外の何ものでもない。キリストの羊だけが決して滅びることはないのである。

自分は決して投げ捨てられずまた滅びない、と言いながら罪の中を継続して歩む者は、哀れにも自らを欺(あざむ)いている者である。ここで約束されているのは「キリスト者の救いの確かさ」であって、罪人や邪悪な者たちについての確かさではない。

キリストに信頼する悔い改めた心貧しき信者にとっては、これほど栄光と慰めに満ちた福音の真理はない。

絶えず何かが私たちを「奪おう」とし「引き抜こう」としていることがわかっても、キリスト者がそれで驚くことはない。悪魔は確かにおり、信者たちはいつもその存在を認め、意識しているが、キリストの「手の中で」守られている。真の信者たちは「守られている」が、そうとわからず「感じられない」場合も多い。

キリスト者であってこの教理を把握していない者は、まことに大きな損失をしている。この教理は、福音という良き訪れの大切な要素であり、また誤った教理に対する安全弁である。

（5）わたしと父とは１つです

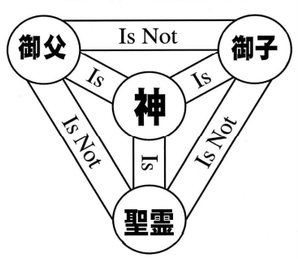
最後に主の口から、驚くべきことばが発せられた。「**わたしと父とは一つです**」

「一つ」(ἓν エン：数詞)主格 中性形 一つ)と訳される数詞が男性形であれば、「わたしは『父』である」ということになり、イエスと父は同一の存在になる。

しかし、この数詞は中性形であるから、イエスと父の間に本質的な一致があるという意味になる。

父と子が同じ１つの人格であると言われたのではない。それは三位一体の教理をくつがえすことである。主が言われたことは次のようである。

三位一体の関係説明図



「わたしと永遠の父とは、二人の区別されるべき人格であり混同されてはならないが、その本質、性向、神性、力、意志、わざにおいて１つである。それゆえ、わたしの羊たちを守ることに関してわたしのなすことは父もまた同じくなすのである。わたしは父と別個にわざをなすことはない。」

幸いなことにキリスト者は、主イエスの御手によって握られているだけでなく、御父の御手によっても握られ、守られているのである。これほど安全な場所はない。

J-ばいぶるGREEK 原書講読画面
ヨハネ 10:29

ὁ πατήρ μου ὃ δέδωκέν μοι πάντων μεῖζόν ἐστιν, καὶ οὐδεὶς δύναται ἁρπάζειν ἐκ τῆς χειρὸς τοῦ πατρός.

<文法解析ノート> Joh 10:29

[1] ὁ **ὃ** dnms 冠)主男単 冠詞(この､その)
[2] πατήρ **πατήρ** n-nm-s 名)主男単 父
[3] ἐγώ **μου** npg-1s 代)属1単 私､わたし
[4] ὅς **ὃ** -apran-s 関代)対中単 この～
[5] δίδωμι **δέδωκέν** vira--3s 動)直完了能3単 与える､～させる
[6] ἐγώ **μοι** npd-1s 代)与1単 私､わたし
[7] πᾶς **πάντων** ap-gn-p 形)属 全部で､すべての､どんな～でも､あらゆる､あらんかぎりの､1つも欠けが無い
[8] μέγας **μεῖζόν** a-mnn-s 形)比較主中単 この上もなく
[9] εἰμί **ἐστιν,** vipa--3s 動)直現能3単 ある､～である､～です
[10] καί **καὶ** cc/ch 接)等位/完 そして､～さえ､しかし､しかも､それでは､そうすれば
[11] οὐδείς **οὐδεὶς** apcnm-s 数)主男単 何も～ない
[12] δύναμαι **δύναται** vipn--3s 動)直現能欠3単 できる
[13] ἁρπάζω **ἁρπάζειν** vnpa 不定)現能 奪い取る
[14] ἐκ **ἐκ** pg 前)属 から､によって､で
[15] ὁ **τῆς** dgfs 冠)属女単 冠詞(この､その)
[16] χείρ **χειρὸς** n-gf-s 名)属女単 手､神の力
[17] ὁ **τοῦ** dgms 冠)属男単 冠詞(この､その)
[18] πατήρ **πατρός.** n-gm-s 名)属男単 父

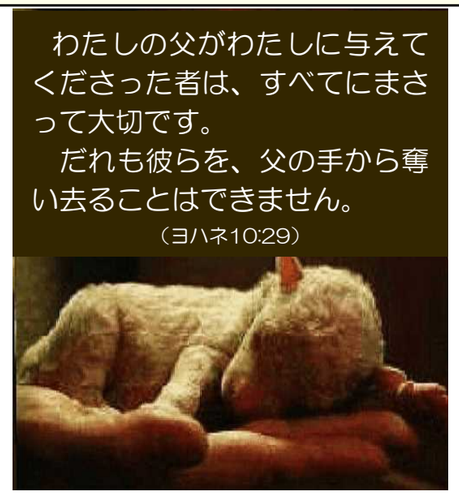
<聖書翻訳比較ノート>

【新改訳2017】わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。

【新改訳改訂3】わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。

【口語訳】わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。

【新共同訳】わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。

【NKJV】"My Father, who has given them to Me, is greater than all; and no one is able to snatch them out of My Father's hand. （わたしに彼らをお与えになった父は、すべにまさって偉大です）

【TEV】What my Father has given me is greater than everything, and no one can snatch them away from the Father's care. （わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です）